

器楽のグループ・レッスンにおける学び

日本教育心理学会第52回総会
2010年8月29日
丸山 慎・菊池 満・滝山聖士

【目的】

初めて手にする楽器の演奏技術を学ぶとき、音楽の先行経験や他者とのアンサンブル活動はどのような意味を持つだろうか。このような問題について、本研究は「ヤマハじゅにあ管弦打アンサンブル」[(財)ヤマハ音楽振興会]という試みを対象にして検討する。このアンサンブルの受講者は、既にヤマハ音楽教室において音楽の総合教育を受け、鍵盤楽器の演奏が可能な小学生たちであり、彼らは希望する管弦打楽器のいずれかをグループ・レッスンのなかで学習する。合奏技術の習得といった音楽的側面はもとより、グループでの活動が受講者の社会性・協同性の発達にも寄与するのかどうか、そして彼らの学び方の特徴は何か—これらの観点について議論していきたい。

【方法】

■調査対象：同一の講師1名が担当するヴァイオリン（以下「Vn.」と表記する場合がある）の2クラス（以下「クラス①・②」と表記）。既述したように受講者はヤマハ音楽教室においてピアノ・エレクトーンを用いた総合的な音楽教育を受けている小学生であった。各クラスの概要は以下の通りである：

	受講者数[調査時学年内訳]	Vn.経験者の有無
クラス①	4名[小学2年生1・3年生1・4年生2]	有[4年生1名]
クラス②	5名[小学2年生4・4年生1]	無

図1. ヴァイオリン・クラスの受講者とVn.経験者の有無

■調査期間：2008年11月－2009年4月（計18回のレッスン）

※受講者の一部に変動はあるもののレッスンは現在も継続中

■調査場所：ヤマハ日吉センター（神奈川県・川崎市）

■レッスン実施形態：基本的に楽器別レッスン2回、その後他の楽器との合同レッスン1回というサイクルで実施。レッスンは保護者も同席して見学可能であった。

■調査方法：保護者から調査協力への同意を得た上で、ビデオカメラを使用した観察および毎レッスン終了時に受講者に対するアンケート調査を実施した。

■アンケートの主な調査項目：レッスンに対する意欲や講師および他の受講者への意識などを調査するために、「今日のレッスンに来る前に、どんなことができるようになりたいと思っていましたか？」、「レッスンの間、一緒に演奏しているお友達の音はよく聴こえましたか？」等々の質問を設けた。他にも「ヴァイオリンを弾く時に、（身体の）どこが一番難しくて、大事なところだと思いますか？」あるいは「今日のレッスンで、一番疲れたのは、身体のどの部分ですか？」といった質問を設け、器楽演奏における身体的な側面に関する意識も併せて調査した。

【結果】

アンケート調査の結果からは、まず受講者たちが概して非常に高い意欲を持ち、自分なりの具体的な目標を設定してレッスンに参加していたことがうかがえた。特に他の楽器との合同アンサンブルは大きな魅力になっていたようである。次に、本研究の特色である「グループ・レッスンにおける未経験の器楽の習得」という点について、一つの結果を参照しておきたい。図2は、「先生やお友達とレッスンをしていて、“まね”することができたらいいなあと思うことはありますか？それは誰のどんなところですか？」という質問のうち、「誰の…」に関する回答を、「講師」、「他の受講者（特定の受講者を指名した場合と指名していない場合[例えば“みんな”]）」、そして「特に誰にも言及していない場合」に分けてクラス別に集計したものである（ただし言及がない場合でも、回答内容からその多くが「講師」と推測される）。

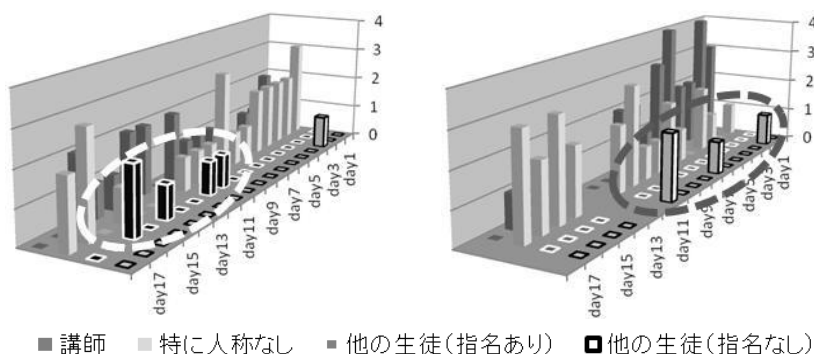


図2. 誰の“まね”がしたい？

（左：クラス①[Vn.経験者有] 右：クラス②[Vn.経験者無] ※グラフ奥から「講師」「特に人称なし」「他の生徒（指名あり）」「他の生徒（指名なし）」

当然のことながら、両クラスともに「講師」への言及が多くなっている。しかし、レッスン後半になるとクラス①(Vn.経験者有)では、経験者の名前を挙げて「〇〇ちゃんのきれいな音」といった回答がみられるようになった(図2左:白色点線部分)。一方、クラス②(Vn.経験者無)では、「みんなのきれいな音」といったような回答があったのみで、個人の名前が挙げられることはなかった(同図右:灰色点線部分)。

【考察】

受講生たちが高い意欲を持続していたという結果は、先行経験のある鍵盤楽器とヴァイオリンとの差異が、彼らにとって(少なくともネガティブな)コンフリクトを引き起こす要因ではなかったことを示している。むしろそれは、これまでの経験では明らかになっていなかった音楽の側面が、ヴァイオリンを通して探索され始めたということなのかもしれない。また図2の結果が興味深いのは、受講者たちが次第に周囲に対する意識を高め、講師以外の有用なリソースを発見していたことが示唆されるからである。特にクラス①では、受講者が自発的に周囲の経験者から情報を得ようとする姿勢が促進されていた可能性があるといえるだろう。グループ・レッスンという環境のなかで、ヴァイオリン演奏の上達に関わる情報を受講者がより深く識別・利用できるようになったのだとすれば、それはある種の「知覚学習」(Gibson, 1969)であると考えられる。器楽の習得という文脈において、このような学習のあり方が持つ含意は大きいのではないだろうか。この点については引き続き検討していく意義があるだろう。

引用文献

Gibson, E. J.(1969) Principles of perceptual learning and development. New York: Appleton-Century-Crofts.